

# ふれあい

2018年 9月  
秋号 No.15

〒333-0831 川口市木曾呂1317

Tel.048-296-4771 Fax.048-296-7182

ホームページ：<http://www.kyoudou-hp.com>

特集1

## 協同病院の

# 地域とのかかわり

地域のなかで協同病院はどう見られている？

特集2

# 40周年記念

6月19日(火)

## 子育てカフェ開催

お茶やお菓子を食べながら、先生に診察室の中では聞けないことをじっくり聞いてみたり、ほかのお母さん・お父さんと子育てに関して普段心配していること・疑問に思っていることを共有したりする「子育てカフェ」を開催しました。医師や看護師、管理栄養士、保育士が中心となり、今回は5組のお母さんとお子さん、付き添いのご家族が参加されました。お母さん方からは「子どもが安心して遊べていたので安心しました」「先生や保育士さん、栄養士さんともお話しできてとても良かった」「ぜひ今後も続けてほしい」といった感想をいただきました。



## 対談 ▶▶ 健クリニック × 埼玉協同病院

# 在宅は、開業医と病院の チームでないと守れない。 終末期を見守る病院に期待

埼玉協同病院は、近年特に特に地域の開業医の先生方との連携を強めてきました。健クリニック院長の佐藤先生とは、クリニック開院時の18年前から患者さんの紹介を通じて連携を深めています。

連携での課題や期待を増田院長と話し合っていました。

## 顔の見える関係性を

**増田:** 当院はこの4月1日で40歳になりました。いろんなことがありましたが、地域の開業医の先生とはここ10年ぐらいで本当に関係が深くなってきたと感じています。私たちは、地域の医療を守るために開業医の先生たちとどう力をあわせればいいのかを考えていますが、ぜひ今日は先生の忌憚のないご意見を伺えたらと思っております。

**佐藤:** 2001年の5月に鳩ヶ谷駅が出来た時に健クリニックを開業し、18年目になります。循環器を中心に内科を幅広く診ています。開業した頃には重症の患者さんを受けてくれるところが少なかったです。その当時は埼玉協同病院は謎の病院だったんですが(笑)、患者さんを受けてもらったり、連携の会に出席し紹介した患者さんのその

後の情報をいただき、しっかり診てくださることが判り徐々に関係が深くなりました。**増田:** 僕もクリニックの経験があるのでわかるんですけど、忙しい時に紹介状書くのってすごく大変ですけど、先生の紹介状はいつも素晴らしい。これだけきちんと書くのは大変だろうなと思いつつ読んで頂いています。

**佐藤:** 若い時に総合病院の心臓外科でかなり鍛えられました。いつもカルテのサマリーのような感じで、どういう人か分かるストーリーの様に書いています。協同病院からも紹介状のお返事はしっかり頂いています。

**増田:** 地域連携課が目配ってはいませんが、僕らも抜けている点が多々あると思いますので、そういう時は「来てないよ」と気軽に言っていただける顔の見える関係性を築いていきたいと思っています。



佐藤 健志医師  
健クリニック院長  
川口市医師会副会長



増田 剛医師  
埼玉協同病院院長

**佐藤:** 協同病院はちゃんと追跡してくれているからいいんですけど、紹介した患者さんに別の病気が見つかって違う科なり他の病院に行く関係が切れることが多いんです。

## 在宅でも安心できる病院

**増田:** 先生は、川口市医師会の副会長になられたわけですが、協同病院は地域の開業医の先生から「頼りになる病院」でありたいと思っています。連携をすすめる上でどんなことが必要でしょうか。

**佐藤:** それぞれの立場で地域連携を強化していく上で、医師同士のつながりが一番大事になってきますね。医師会の学術講演会などで、医師同士がつながりを持つことが大事です。

**増田:** 僕は院長になって7年目ですが、以前と比較して川口市全体の医療・介護施設

との関係が強くなってきました。健康づくりや認知症の対応なども、住民組織や行政とタイアップすることを重視しています。病院としては、急性期と救急・がん診療、整形外科の人工関節などに代表される高齢者の生活支援の医療などを柱にやっていきたいと考えています。

**佐藤:** 終末期をやっていただいているのは期待しています。これからゆるやかなホスピタリティなものが本当に必要になってくる。1人か2人で暮らしているお年寄りが、入院をせず自宅で最期を迎えたいという時にも、手助けになるような存在が必要だと思います。私も最初のころは在宅で看取りを行っていましたが、やはり政策上どんどん敷居が高くなり、一人で行うには無理な時代だと思います。

**増田:** 在宅支援は24時間対応が求められますし、チームを組まなきゃいけないですね。地域の先生方との関係で病院の役割をどう定めるかということだと思います。

安定している慢性疾患の方や風邪などは、圧倒的に病院より開業医の先生の方が機能的です。そういう場合にこちらもご紹介しますが、佐藤先生は本当によく診てくださるので安心してご紹介できます。患者さんにも言いやすいんです。

病院から開業医さんに帰られ、時々病院は結構高い薬使っていて困るみたいな話も聞きますが、薬の問題などは大丈夫ですか。

**佐藤:** 飲む薬は大体大丈夫です。注射セットなどは返品がきかないので、用意して不要になった場合など困ることはあります。

いつも診ている患者さんが、たまたま近医(医師が他院に紹介するときの宛名:近い医師の意)の整形を受診して、そこから紹介されて病院に行くような場合、整形には返事がいくのですが、もともとのかかりつけ医には情報が来ないということもあります。

## 地域医療の柱として

**佐藤:** ところで、病院が大きくなればなるほどいろんな問題が出てきますが、協同病院は先生から見てわりと適正規模ぐらいなんじゃないですか。

**増田:** 先生がおっしゃることよくわかります。うちのいいところは、医局がひとつで医師同士が科を越えて連携しやすいところです。だから複合的な問題を抱えておられる患者さんも積極的に受け入れ解決してい

ける病院だと自負しています。そういう意味でも今の規模は適正かも知れません。

**佐藤:** 中核市になった川口市には、市の休日・夜間診療所がありません。これまでそれぞれの医療機関ごとに決めてやってきました。本来は市の事業だと思いますが、地域医療を支える市民のための医師会としても今後の大きな問題です。

いろんな意味で、地域医療のために協同病院は柱としてやっていただかないといけません。

**増田:** 立地的には川口市北部地域を中心に住民の要求に応えるというポジションかなと自覚しています。今後も医師会の先生方とも協力して、地域の医療を守っていきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。





## 協同病院の 地域とのかかわり

### 地域のなかで 協同病院は どう見られている？

埼玉協同病院は、その開設以前の診療所時代から地域医療を積極的にすすめることを重要なキーワードとして取り組んできました。病院開設40周年を迎える今、改めて地域の中での埼玉協同病院の役割、期待などを日ごろから連携する各事業所の皆さんに語っていただきました。

#### 老人保健施設みぬま

### 急性期病院と老健施設 多世代の課題に向き合い 支えあう

高橋 恵子 看護師 老人保健施設みぬま 管理看護長

埼玉協同病院で退院調整専任看護師として働き、老人保健施設みぬまへ異動しました。両事業所を知る高橋さんに聞きました。



#### 医療と介護の現場

「みぬま」に来てから、あらためて医療と介護での大きな違いを感じています。

特に急性期病院では、医療依存度が高く、施設では、その人らしく最後まで生き生きと過ごせるための支援が大事になります。ただ、どちらも、看取りまでの過程の意思決定支援が重要であることは共通していると感じます。

#### 排泄ケア「さわやか」

「みぬま」には、事例検討や看取りのスキルを勉強する「いのち輝き委員会」があります。口から食べにくい方にも、「食べたいものを」「食べられるだけ」「最後まで」を大切に。職員は、排泄ケアを「さわやか」、汚物



処理室も「クリーンルーム」と呼びます。汚いと言葉に出すと本当に汚く見える。さわやかにさせていただくためのケアを「さわやか」と呼んでいます。

#### 「協同病院・みぬま」との連携

病院機能を発揮してもらうためにも、老健施設の役割があります。協同病院での緊急受診で、入院する必要がなくても介護の課題が残されている人の紹介や、急に介護者が入院してしまった場合の緊急入所なども協同病院と連携を取りながら受け入れています。市内に1カ所しかない協同病院の緩和ケア病棟も、待機患者が多い場合には、痛みが落ち着いた方はみぬまでの受け入れも相談させてもらっています。

#### 困難な人に寄り添ってこそ

協同病院・みぬまでは、さまざまな生活背景や孤立、貧困を抱えている方も多くなってきました。地域住民の方と手を取り合い、フードドライブや多世代食堂のような誰でも気軽に利用できるものを共に運営し、入院・入所に関係なく、日常的に支援の手を差し伸べられる事業所でありたいと思っています。

#### さいわい診療所

### 地域が求めているのは在宅。 連携で患者・家族の願いをかなえたい

関口 由希公 医師 さいわい診療所 所長

患者さんにとっては、地域の診療所があり、いざとなれば協同病院がある。診療所にとっても、協同病院はどんな患者さんでも診てくれる安心感があると話します。



#### 困った時の最後の砦

がん末期の人の受け入れ病院は少なく、協同病院の「緩和ケア病棟」の存在は大きいです。抗がん剤はもう無理だからと、自宅近くでの療養を始める人が、本当に苦しかった時の入院を希望されます。医療従事者も患者さんもお家族も助かっています。

「救急」も、相談するとほぼ100パーセント受けてくれ心強く思います。

#### 何より患者の願いを大切に

やはり地域で求められているのは在宅医療ですね。365日24時間在宅支援の診療所で、1人で75人を診ています。休日・夜間の在宅支援体制が、協同病院を含めたグ

#### ケアセンターきょうどう

### 病院との共同は地域の健康づくり 地域で安心の看取りを

山本 千恵 介護福祉士 ケアセンターきょうどう 所長

「ケアセンターきょうどう」は、63人の職員が定期巡回と夜間対応型の事業、訪問看護、居宅介護支援、ヘルパー事業を運営しています。



#### 看取りの選択肢を支援する

自宅での看取りの希望でも、間もなくという時に不安から「やっぱり病院に戻ります」という方でも、入院してすぐに亡くなるケースでは「やっぱり自宅が良かった」と言われることもあります。

今後は、緩和ケア病棟のカンファレンスなどにも参加して、在宅での安心の看取り

を進めたいと思っています。病棟の看護師さんにも在宅での医療の実践とスキルをお伝えして、ご家族の不安を取り除いたり、在宅での経験が院内の医療の質の向上に役立てたらいいなあとも思っています。

#### 幅広い情報交流で

「ケアセンターきょうどう」の訪問系の看護師も協同病院の病棟経験がない人がほと

ループでできれば一番いいんですけどね。情報共有が病診連携の大きな課題です。病気や治療方針、患者本人とご家族の希望、終末期に食べられなくなった時どうするかなど密な情報共有の必要があります。

#### 連携の在宅支援体制

患者さんに接する機会が多い診療所は、その人の生活や人生が見えるので、楽しくやりがいがあります。短期間でも病院と診療所の研修・見学の人事交流があれば連携もさらに良くなると思います。

画期的な取り組みとして、7月から外科の先生が週1回診療を持つことになりました。「若手の先生が診療所に来てくれてすごく頼もしいですね」って組合員さんの期待はとても大きいです。

らんで、互いの理解不足もあり思いがうまく伝えられないこともあります。職員の育成も含め、病院との定期的な幅広い情報交流が必要だと感じています。

協同病院からもアプローチしていただいで一緒に訪問などできたら、医療と介護の連携の質も高まると思います。

病院の患者さんが安心して在宅に戻れるようにお手伝いしていきたいです

#### 理念のつながり大切に

病院の患者さんが地域に帰る在宅復帰のお手伝いをしたいし、「ケアセンターきょうどう」としては、ターミナル期の方はもちろん、比較的元気なうちからの関わりで、地域の健康づくりにつながると考えています。そうした理念がつながる病院との関係を大切にしていきたいと思っています。

## 川口市の健康度アップへ

健康が最終目標でなく、  
生き甲斐や仲間づくりへ  
誰かのために動ける組織の強み

椎名 明子保健師 川口市保健所地域保健センター センター長補佐兼成人保健係長(保健師長)

中核市になった川口市には保健所ができ、その中の一部として地域保健センターがあります。川口市では保健師約90人が地域の健康づくりに大きな役割を果たしています。センター長補佐の椎名さんに事業内容や協同病院について伺いました。

## 保健センターは

赤ちゃんの健診から、子育てに役立つさまざまな相談や教室、訪問。また、がん検診や健康相談、健康教育、お子さんや高齢者の各種予防接種業務など、広い範囲の事業を行っています。

地区担当の保健師は、個別のケースに関して、医師や病院の相談室、訪問看護などにも連絡をとりながら、連携をしています。

## がん検診は2割アップ

平成28年度からがん検診等の受診のお勧めとして、はがきによる個別通知を対象となるすべての市民に行いました。このことにより、受診可能な検診が分かりやすくなり、この年の受診者数は検診全体をみると前年比で2割ほどアップしました。また、『けんしんガイドブック』なども作成しご案内をしています。今後より分かりやすい案内に努めたいと考えています。

協同病院は多くの診療科があり、受診を希望される方も多いと感じます。早期発見、早期治療が何より大切になりますので、今後も健康を維持するため地域に開かれた病院であってほしいと思います。

健康については、それが最終目標ではなく、生きがいづくりや仲間づくりなどにつながる大切で、中核市になり保健師の数も増えていきますので、今よりもっと保健師が地域に出て、地域で活動している方たちとの関係が近くなり、気軽に相談し合えるようになれば、新しい取り組みが生まれるかもしれません。

いきいき・楽しくを  
サポート

川口市は住民も増え大きな市となりましたが、虐待などの事例が大きな事件として取り上げられることが少ないように感じています。それは、各機関の連携が個別の対応に結びついているからではないかと思わ

れます。お子さんのことは本当に待たなしの状況が多いため、医療機関からの連絡はとても重要です。

協同病院の活動の一つとして、住民の組織活動に力を入れていることは、大変素晴らしいことだと思っています。病院主催の市民公開講座で600人集まったというお話を伺いましたが、市が行う講座でも100人規模で集まっていたのは大変なことです。

県全体で力を入れている健康長寿サポーター養成講座なども実施していますが、自分の健康だけではなく、家族や友達のような“人のため”に動けることも大切です。話し合いや活動の場面で、それぞれ役割や出番を用意できることは、すごいことだと感じています。

## 前向きで、働きがいも

もう一つ、職員さんの教育について前向きなところが協同病院の特徴だと思います。他職種で学ぶ機会や、いろいろな機関との研究活動もされているようですね。そのような病院全体の動きは、働きやすさや、やりがいにもつながるのではないのでしょうか。

私も以前、個別対応をする際に相談員さんなどとやり取りをする機会がありましたが、チームで前向きに仕事をされている様子を見てとても心強く感じていました。

今後も市民の健康支援に向け、良い関係づくりをすすめられればと思っています。



## 川口市の救急医療の充実へ

信頼関係を深め  
1分でも早く届けたい

小暮 由紀夫 川口市消防局北消防署長

川口市の年間の救急搬入件数は平成29年で28,835件。前年比で1,442件増です。そんな中でも、救急隊が現場に到着するまでの川口市の平均は約8分。全国平均の8.6分を下回っています。救急の現状と協同病院への思いをお聞きました。

## 協同病院の実績

埼玉協同病院では、川口市からの救急搬送数が平成27年2,090件、28年2,516件、29年2,780件の受け入れで、全体の13.5%。市内の医療機関受け入れのナンバー3の実績です。院長先生にも無理難題を聞いていただいております。

13台の救急車が全隊出動しているケースがかなりあります。高齢化や核家族化で症状や医療機関がわからないなど、安易に救急車を呼ぶ影響もあると思われます。救急車の適正利用を広報しております。

## 救急の課題

協同病院も参加いただいているSSN(急性期の脳梗塞治療ネットワーク)で脳梗塞は充実していますが、脳外科の24時間受け入れは市内で済生会川口総合病院1カ所だけです。

特に、夜間・土日の特殊な科はかなり遠方へ搬送するケースがあります。協同病院

にも、夜間の整形外科での対応をお願いしているところ。 (協同病院では、脳外科と整形の医師には、撮った写真をタブレットに送って自宅でも診てもらえるような体制を作っている)

## 顔の見える関係

協同病院でも、研修医の先生方の同乗実習を行っており、先生からも好評です。24時間寝食を共にします。119番からプレホスピタル(病院前救護)、病院搬送までの流れを理解することで、救急隊の現場での活動や思いを想像できるし、救急隊も医学的なことや医療現場の現状が先生から聞けてメリットのある研修になっています。お互いに顔の見える関係づくりができます。

## 結果を早く出して

東京消防庁では遅くとも3分以内で受け入れの回答をするルールですが、川口市では7~8分待たされるのが当たり前。15分になる病院もあります。空白の時間が家族



のジレンマからトラブルになるケースもあります。

多くの病院が、事務、看護師、医師の伝言ゲームのようにとても時間がかかっております。すぐ医師が電話を取るか、受けた人が決めるようにならないかと思えます。

ある病院は、CCUの先生の院内用携帯へのホットラインができています。

## ともに救急医療を

協同病院では、住所がない方など対応に困惑するケースも多く受けていただいております。本当に感謝しています。

患者さんからも、協同病院の先生も看護師さんも優しいという話はよく聞きます。痛くて我慢できないのに「協同病院でないとダメだ」と言われ、「ダメなら明日自分で行きます」と言われる方もあるほどです(笑)。

これからも、医療機関と顔の見える関係作りをしていきたいと思えます。今後よろしくお願ひします。



## 埼玉協同病院の40年を聞く

# 組合員要求、医師養成 走り続けた病院建設と増築

斉藤 正 元事務長 (1988年から1992年、1997年から1999年)

「ちょっと一回見に来てくれ」。知り合いに誘われて建設中の病院を見に行っただけから建設にかかわり始めた斎藤さん。増床と経営の苦労の連続の中で学んだという協同組合の役割や労働組合との関係、これからのネットワークづくりなど余さず語っていただきました。

### 「まあいいから、いいから」

埼玉に来る前は、妻が購買生協の組織担当をやっていましたが、生協の中に医療があるなど全く知りませんでした。当時さいわい診療所事務長の富田さんが昔からの友達で「建設中の病院を見に来て」と誘われました。秋口ぐらいには、まだ一階が立ち上がっていたかどうかで、これは絶対来年4月開院には間に合わないよと言った記憶があります(笑)。

そうしたらすぐに、我が家にどこどこと来て「まあいいから、いいから。手伝ってよ」。結局、おもしろいかなと会社をやめて1月に来て、建設事務局で施設管理の仕事をする事になりました。わたし以外図面を読める人が1人もいない。どこに何があって、どうなっているか、極端に言えば誰もわからなかった。また最初、医療機関

はえらい暇だとも思いました。

当時、組合員さんは「病院が出来さえすれば夢が実現する」と期待が大きいあまり、要求もほとんどなかったんじゃないかな。実際に使っていく中で、こうした方がいいとか、待ち時間を短くする工夫はないのかとか、いろんな意見が出てくるようになりましたね。

オープン前の75床から132床のフル稼働までに1年くらいかかりました。診療初日は勢ぞろいして待っていましたが外来患者は30～40人。(診療所でも1日40～50人来ていた)

しかし、2日目ぐらいには1日200人は大きく超えていました。浦和民主診療所とさいわい診療所、川口診療所からの患者さんが退院して帰っていくと、協同病院は親切でいいよって広まって、組合員さんもどんどん増えていきました。ただ、最初の1～2年は

想定以上の赤字にとっても苦労しました。

### 赤字解消へ増床

続く赤字に「これはヤバイ」と経営改善プロジェクトチームを作って職員みんなで真剣に論議しました。当時、私は施設管理課の職員がなんでそんなこと考えなきゃいけないのって思っていました(笑)。

130床では、絶対赤字にならないということで「千人外来」を打ち出し、二階の医局や院長室とか全部ベッドに変えて、3年目には180床に増やし脳外科を開設してやっと一息着きました。

今なら怒られますが、看護婦さんも医師も足りないことは最初からわかっているから、とにかく物を作れば何とかせざるを得ないから頑張るだろうという感じです(笑)。

全国の経営交流会でも、やっぱり規模を大きくしないとダメだと同じような悩みで



### 労働組合に励まされ

患者中心の医療をやっていくことを開設当初から大切にしていました。また、患者サービスを第一に考え、一人二役の仕事をしないとニーズにこたえられないと常に話していました。労働強化政策だとか、一つのことさえもともにできないのに何事だっていう人たちもいました。ただ、労働組合は無茶な労働強化はもちろんだめだけど、患者の立場を大切にという点では理解があって、そういう職員こそ一人前の労働組合員なんだって、むしろいろんな場面で励まされ教えられたことのほうが多かったですね。

### 病院と診療所に共通の機能を

診療所と病院との連携については議論の多いところですが、病院は急性期や回復期などもまかないながら、在宅医療や介護と一緒に生活全般をバックアップするための総合的な立場に位置づけられるのがいいと思います。

診療所は、単科であってもいいとは思いますが、在宅での看取りが普通になるとか、入院はできなくても病院に近い機能や対応する力とレベルが必要です。予防からエンドステージまで、それぞれが共通する高い機能を持って役割分担しないと、いきなり「はい、あなたは病院で、あなたは診療所か介護施設へ」など、パッと分けなくてもそのすき間に患者さんが落ちこちる可能性があります。

新しい建設基本構想には、地域ケアとか

回復期リハなどは当然必要ですし、医療技術や医療サービスのレベルを上げるには、できれば500床とか、がん診療設備の充実などを目指してほしいと思います。そのためには医師養成がますます重要な課題となります。

### 病院づくりは人づくり

医療生協の前進は、従来医療は誰かが与えてくれるものだったのを、自分たち(患者・組合員さん)が作り、育て、医療人とともに活動し、自分たちの要求をぶつけていくというやり方に自信が持てたことが大きかったと思います。

医療生協の組合員さんは、医療・介護の問題解決を地域の暮らしの中で、地域の人と一緒に取り組んでいます。医療生協は決してクローズドな組織ではありません。これからは医療生協の役割と活動の幅を広げないといけないと思います。

「医療生協さいたま」の全県ネットワークも隔々にサービスや医療・介護要求を掘り起こすしくみを一段と整備しないと、安心なくらしづくりに役立たないことになりかねません。

病院をつくるということは、技術や医療の質の向上と、施設を支え運営する職員と組合員とのネットワークを如何にレベルの高いものにするか、そして、地域とも価値観や団結力をどうやって共有するかに集約されると思います。その役割をセンター病院がどう担うかが、新しい病院づくりのコア(中心課題)になると思います。

11月3日  
(土・祝)  
10時~15時

# 埼玉協同病院40周年記念 健康まつりを開催します!



## 地域の皆様に感謝を込めて

開院40周年の記念行事として、埼玉協同病院の敷地内で『健康まつり』を開催します。  
『地域の皆様に、これまでの感謝を込めて、埼玉協同病院が「歩んできた40年」と、埼玉協同病院の「役割」や「元気な姿」をお知らせする』事を目的に、皆様に喜んでもらえるような楽しいイベントを企画しています。

## 皆様と一緒に楽しむ「健康まつり」に!!

多くの方にご来場いただけるよう、入場無料はもちろんの事、お子様から大人の方まで楽しめるような内容を予定しております。



### ★メインステージ

近隣地域の音楽サークルやダンスサークル、太鼓サークル等の皆様をお招きして、お祭りを盛り上げてもらいます。

### ★学習企画

医師の「ミニ健康講座」、「憲法カフェ」(弁護士)や「いのちの授業」(助産師)などを会場内で開催します。関心のある講演に足をお運びください。

### ★健康づくりゾーン

医療生協のさまざまな健康チェック(骨密度測定、握力等)や健康体操(フレイル予防、笑いケア等)を体験して、一緒に健康づくりに取り組みましょう!また保健師による「健康相談」も行います。

### ★なんでも相談

医師、看護師、管理栄養士、社会福祉士等の専門職種による「なんでも相談」を行います。病気の事や生活の困り事等、日頃お悩みの事がありましたら、是非この機会にご相談ください。

### ★協同病院わくわく体験

医師、看護師等の病院で働く専門職種の体験や、救命方法(BLS)のレクチャー、救急車の試乗等、お子様から大人の方までたくさん体験してください。

### ★模擬店・フリーマーケット

組合員・職員を中心に、さまざまな模擬店やフリーマーケットで皆様のご来場をお待ちしております。たべものはおいしいやきそばや豚汁、ポップコーンなど。子ども遊びでは木工教室、ストラックアウト、ヨーヨー釣りを予定ですのでお楽しみください!

職員・組合員一同で皆様のご来場を心よりお待ちしております。  
ご家族ご友人もお誘い頂き、埼玉協同病院40周年の健康まつりを楽しんでください!!

## 7月21日(土) 癒しのイベントを開催



「源次の糸乃会」の皆さんをお招きし、津軽三味線と尺八によるコンサートを行いました。「源次の糸乃会」はお客様との参加型演奏会をモットーに、川口市を中心に、福祉センターや施設などでボランティアによる演奏会を行っています。今回は「よされじょんがら節」や「津軽じょんがら節六段」の他、誰もが知る坂本九さんの名曲「上を向いて歩こう」を演奏されました。また世界のメロディーと題してイギリスの民謡「メリーさんの羊」などを演奏され、曲に合わせて組合員さんが歌を披露しました。鑑賞された入院中の患者様からは「入院中に三味線の演奏が聴けるなんて素敵な病院だね。元気がわいてきたよ」との感想をいただきました。毎年さまざまなゲストをお呼びして開催しておりますので、決まり次第、ホームページや広報紙にてご案内させていただきます。



## たまねぎベビー といっしょに

### 子どもの事故予防 Part 2

幼児期になると行動範囲が広がるので、屋内から屋外へと事故が起こる範囲も広がり、事故の種類も多彩になります。まだまだ危険を判断する力が不十分なので、目の前のことに夢中になってしまうこともあります。すり傷、切り傷をつくりながらたくましく育つ子どもたち。何でも『危ない!ダメ!』ではなく、危ないときにはすぐに手助けできるように見守ってあげたいですね。



### 幼児期の子どもの事故予防10ヶ条

- ①ベランダや窓際には足台になるようなものは置かないで!
- ②好奇心旺盛、包丁やガススイッチ、ライター、お酒や医薬品の管理にも注意を!
- ③衣類選びもフードやヒモ、装飾には気をつけて!
- ④水遊びをする時はライフジャケットを着けて、必ず目を離さず!
- ⑤公園でも油断せず、遊具は成長に合わせて付き添いや見守りを!
- ⑥飛び出し事故に注意して、ボール遊びなどは安全な場所選を!
- ⑦チャイルドシートは、どんなに短い距離でも面倒がらずにベルトを!
- ⑧自転車に乗る時はヘルメットをかぶろう!
- ⑨外では必ず手をつないで、大人が道路側を歩こう!
- ⑩交通ルールや遊びのルールも一緒に学ぼう!

何が危険で、どうしたら安全か  
使い方やルールを教えてあげることも大切です!!

増田院長の

# 今日もニコニコ😊 VOL.15

院長  
増田 剛



## 地域と連携し、成長・進化の40年

今年2018年4月1日に埼玉協同病院は満40歳になりました。本号では、その40年を振り返る中で、特に地域との関係性についてフォーカスしてみました。幹線道路も未整備な田畑の真ん中に建ち上がった「謎の病院」が、地域住民に支えられながら成長していった様子を想像しながらお読みいただければ幸いです。近隣の医療・介護事業所との連携の進化は、その時々々の当院のビジョンを確立する上で大変重要な要因となりました。特に、「地域包括ケア時代」が叫ばれ始めたこの約10年間の連携の進化は目覚ましいものがあります。私たちの事業所は今や「医療介護複合体」として存在し、連携無くして人権をまもることは出来ない、そういう時代に突入していると言えます。次の1年、そして次の10年を展望して更なる連携の強化に挑戦して行きたいと思えます。



6月30日、整形外科 仁平医師 桑沢医師を講師に「中年期以降の膝・股関節痛について」の市民公開講座を開催しました。会場のイオンモール川口前川店サイボウホールには、用意した座席を上回り、昨年を大きく超える600名の参加となりました。



## 虹の投書箱だより

### 投書のご紹介

- 5月8日▶採尿用トイレ(B館1階自動精算機前の男性トイレ)に設置されていた荷物を置く棚が撤去されていて不便です。早急に解決して下さい。
- 5月29日▶採尿用トイレに荷物置きを設置してほしい旨を投書しました。本日利用すると立派な荷物置きが設置しておりうれしく思いました。ありがとうございました。

この度は採尿用トイレについてご指摘いただいた件について回答させていただきます。

採尿用トイレには、以前は棚が設置されていましたが、改修工事を行った際に取り外してしまいました。棚がないと採尿のコップや手荷物の置場がないので利用者様にご不便をおかけしました。現場を確認したうえで、小便器周辺に3箇所、個室に1箇所、丈夫な棚を設置させていただきました。今後も快適に利用して頂けるように努力してまいります。 環境管理課 課長 小野 秀敏